



# 妙たえ の光ひかり

通刊43号 復刊24号

1998年12月15日(季刊)

角田山妙光寺 発行  
新潟県西蒲原郡巻町  
角田浜 〒953-0011  
TEL 0256-77-2025

## ギンナンひろい

木枯らしの吹く季節、広い境内の落ち葉掃きとギンナン拾いが大仕事になる。ケヤキなどの葉は乾いていけばよく燃える。だから「落ち葉焚きをして焼き芋しよう」と言えば、子供達が友達まで呼んできて手伝うし、葉の始末も楽だ。

ところがイチヨウの葉は地面に張り付いて集めにくい。そのうえなかなか燃えないから始末が悪い。その中からギンナンをひとつひとつ拾い集め、沢の流水を利用してあの白い実を洗い出し、乾かすところまで。寒いし臭いし腰が痛い。ことしは夏場の多雨のせいかな近年になく小粒で、よけい大変だった。

このギンナンを毎年大晦日、除夜の鐘を撞いた人全員に差し上げている。咲き始めた椿の花の下でこの作業をしながら、残された年内の仕事の段取りを考え、年の瀬まで穏やかな天候が続くよう、思いをはせるのが晩秋から初冬の妙光寺の一コマだ。

## 事実を正しく見る

小川英爾

「仏教は死んだ人を供養するための、死んだ人のためにあるもんだと思ってました。ご住職が言うように生きる悩みや苦しみに応えてくれる、生きてる人のためのものだなんて初めて聞きました」。先日、ある銀行の支店が主催するお客の集まりで講演した。そのあとの懇親会の席で、六十半ばとおぼしき会社社々長の言葉だ。

確かに住職の日常は、法事や葬式と亡くなった人のことが大半で、例えば医者や弁護士のように、直接困りごとの解決の手助けをしているわけではない。ましてこの社長いわく「だって我々がお経を聞いても読んでみても、何言ってるかさっぱりわかりませんよ」というわけだからなおさらだ。

実はお釈迦さまも日蓮聖人も、死後のことではなく生き方を説かれたのに、いつの頃からか死者のための儀礼を行なう寺が、仏教の中心になってしまった。私自身も含めてこの点に悩んでいる僧侶は少なくない。医者と一緒に助かる見込みのない病人に接する僧侶、オウムや統一協会といった宗教に心奪われた人の奪回とその後の世話に走り回る僧侶、不登校や犯罪など世の中とのつき合いがうまくいかない子供の世話にあたる僧侶など、今少しづつだが増えてきている。考えてみれば昔から社会福祉に関わる僧侶は多かった。ところが今は施設やお金で人を救うのは行政が中心になるから僧侶の出る幕がない。一方で新しい問題はたくさん起こっているが、寺を守り自分の家族を守ることに手一杯の僧侶の日常では、確かに先の社長に返す言葉がない。



毎日新聞に一年間連載させてもらい、読者から沢山の手紙と電話をいただいた。正直なところ当初心配した批判めいたものは全くなく、「共感した」というのと、個人的な相談が主な内容だ。連載を終えて二カ月近くたったある日、東北に住む四十代の女性から便せん七枚に書かれた手紙が届いた。

「楽しみにしていた連載が終わって残念です。随分心励まされました。いつか私の身の上も聞いていただきたい気持ちで、ずーっとここ数カ月間思ってきました」。こう始まる文面には、見合いで農家に嫁ぎ二人の子供も中学生になった。今年の冬姑が亡くなり、その四十九日忌法要の前日、元気に会社に出た夫が仕事中に倒れてその夜に息を引き取ったという。それからの自分の心細い気持ちと、周囲との人間関係が綴られていた。

しかし最後には「夫はもう永久に戻ってくることはありません。二人の子供たちに夫に与えるべき愛情を注いで生きて行こうと思います。いつか月日歳月が流れて心から笑えるようになりましたら、またお手紙書こうと思います」とあり、ホッとさせられた。

仮に「こんな私を助けて下さい」「これからどう生きていけばいいのか」などと聞かれても実は私には答えようがない。この手紙以外にも相談はあったし、訪ねて来る人も以前からある。具体的な方策を出せる相談もあれば、自分自身で決めるしかないものもある。

いつも心がけて伝えたいと思っていることは、今置かれている状況を事実としてありのままに見つめること。ところがどうしても勝手な思い込みや、打算、怒りの気持ち等々から事実を正しく見ることがない。心冷静に偏らず、勇気を持って事実を見据える。そこで見えてくる解決方法に立ち向かう力を手助けするのが仏さまの知恵としてお経に説かれている。間違っても金品を納めて仏さまに解決してもらおうものではない。「あなたの病気は〇〇の因縁」なんて誘いにのって高額のお金をとられたという、「宗教被害」なんて言葉まででる時代になった。

## 信 心

# 七面様が縁で檀家に

新潟市

細川マツミさん（77歳）

七百年前、日蓮聖人が佐渡配流の折角田浜に一泊されたのが縁で妙光寺が建てられた。このとき岩屋にいて人々を困らせていた七つの頭を持つ大蛇を教化され、この大蛇が後に「七面大明神」という、日蓮宗信者の守護神として広く祀られるようになった。それが妙光寺裏の岩屋で、日蓮宗に限らず多くの信者のお参りが絶えない。

細山さんも熱心な信者で年に数回、ことに八月十九日の大祭には仲間を誘って貸切バスでの参拝を三十年近くも続けている。夫慎三郎さんの家は代々の曹洞宗で、新潟市内の寺に墓がある。その慎三郎さんも八月には先頭にたつて岩屋に参拝し、総本山身延山裏手の七面山にも幾度となく登山参拝した。

昭和六十二年に亡くなったが、最後に自身でお題目を唱え、それを聞いた曹洞宗のご住職が葬式で法華経を読まれたという。

以来細山さんは妙光寺の檀家に移りたいと願ってきたが、周囲の理解が得られないものと諦めていた。せめてもと勧めた四男夫婦が安穩廟を求め、病死した次女の夫の葬式も妙光寺に依頼して安穩廟に埋葬。それでますます思いがつのり「自分の葬式は妙光寺に」と遺言にした。

しかし自分の最後は自分の手でしめくりたいと考え、親戚、子供たちと話し合う。了解を得ることができて、菩提寺のご住職に話すと「残念だが檀家をやめるなら墓も移して」となり、

市役所に足を運んで墓地移転の手続きも。十月、子供と親戚が妙光寺本堂に集まり、慎三郎さんの十三回忌と先祖への供養をし、安穩廟の次女夫婦の隣の区画に埋葬した。

「念願だった日蓮聖人ゆかりの妙光寺の檀家になってホッとしました。主人も喜んでくれていると思います」と細山さんが言えば、四男の奥さんも「お義母さんのように本当に一途な信仰心が持てることを羨ましく思うし、尊敬しています。頼まれればいつでも運転手になって乗せてきます。私もこの寺の雰囲気が好きですから」と話してくれた。



## 本堂建て替え事業経過報告と

### 今年度分ご入金のお願い

正式に本堂の建て替えを決定して一年が経過しました。十二月一日現在で、寄付申し込み合計金額が二億四十八万八千円になっています。長引く不況のなか檀信徒、安穩会員の皆様のご協力に深く感謝申し上げます。当初の予算総額は二億五千万円ですので、厳しい状況に変わりはありません。引き続き広くご協力をお願いしていきます。

寄付金の五年分割納入の方で早い地区は二回目、大半の方は今年末が一回目の入金になります。お知らせした地区ごとの金融機関の口座にご入金ください。一月に世話人が集計して受領証をお届けします。月掛けの方も一月に

前年分を集計して受領証を発送します。それ以外の地区の方、また都合のある方は妙光寺へ持参されるか、左記の口座へ御送金ください。

第四銀行 西川支店

普通 1130346

『妙光寺本堂工事委員会』

一括納入の方も多く、すでに右の口座だけで五千三百万円（十二月一日現在）の入金をいただいています。各地区の分を含めるともっと多くなりますが、その中間集計は次回にご報告します。



今後平成十一年三月の会議で詳細を検討のうえ実施設計に着手、十一年五月着工、十二年三月完成の予定です。現在、設計のための基本測量が進行中です。景気低迷でやりくりの厳しいなかまことに恐縮ですが、ご協力のほど切なお願い申し上げます。

## 「御坊沢」改修工事完成

墓地のほずれ「題目堂」の脇を流れる御坊沢は、土砂が堆積しやすいためたびたび氾濫しては、墓地と境内に流入して困っていました。しかし現在流れて



いる位置と公図が大きくズれているため、水路を所有する国、管理する県、実際担当する町で調整がつかず対策が取れませんでした。住職が国と県の出先機関と話し合い、町と協議した結果、現在の水路の境内部分は妙光寺が改修工事をしたうえで町に寄付蔵納し、公図上の水路を払い下げ申請する。水路の上流と下流部分は町が改修する。と決着して十一月に工事が完成しました。たった一本の小さな沢ですがとても面倒で、それだけに多くの人から知恵と力で助けていただきました。

## ケヤキの木二十本移植

境内の松が松食虫で多く枯れ、大きな木がすっかり減ってしまいました。先頃高さ八〜十メートルのケヤキ二十本を無償提供するが、運賃と経費は負担してとの話があり、お願いしました。ゴルフ場に植えるために畑で育てたが不況でゴルフ場建設がなく、街路樹に



は大き過ぎるので処分する予定だったとのこと。  
とりあえず仮植えにして、本堂工事を考えながら境内に植え込んでいきます。

## 日蓮聖人第七百十七回忌

日蓮聖人第七百十七回忌の法要を十一月七日に営みました。今年には本堂での法要の後、大広間に金びょうぶを立てて特設高座を作り、落語を楽しみました。暗いニュースの多い昨今、腹の底から笑って心身の健康をと計画したものです。

落語は三回目で、以前には大御所の入船亭扇橋師匠をお呼びしたこともあります。今回は三遊亭円楽一門の慎楽さんで、普段は水原町役場の職員。でも芸は完全なプロで、名人故圓生師匠の前座を勤めたり、立川談志、桂文治師匠らと共演しています。

当日は六十人余りが出席して、心から楽しめました。後日慎楽さんから「お寺でやると笑いのタイミングが合

わなくて苦勞することが多いのですが、妙光寺さんではそれもなく本堂にやりやすかった」との礼状をいただきました。



## その他のご報告

「安穩廟」の契約が二百七十七件になり、基金も一億円を超えました。外国債券で運用益を出していますが、世界的な不況でこれも不安定になり少々苦勞しています。

今年も秋に巻町の内藤清さんから丹精込めた菊花七鉢を、玄関に飾っていただきました。巻町菊花会優等賞の盆栽仕立てもあり、県外の団体参拝者、またお葬式の礼参参りの人たちの心をなごませてくれました。

十一月に九州団体参拝旅行の計画でしたが、参加者が少なく中止しました。来年は身延山の予定です。

住職の毎日新聞日曜版の連載が九月一杯で終わりました。全国からたくさんの手紙が届きましたし、また地元で会う人や檀家の皆さんから、「楽しみにしていたのに終わってがっかりです」と言ってもらい感激です。いまのところ本になる話は具体化していません。

## 里山の花風景（初秋編）

秋号に掲載予定の原稿でした。  
おわびします。

新潟西高校教諭 藤 田 久

九月初め、水溜まりが残る境内や小川付近を歩いてみた。ツクツクボウシの声にぎやかで日差しは強く久々に残暑が戻ってきたような午後だった。

小川では、さかんに水面を行き来するオニヤンマを久しぶりに見た。オニヤンマは流水地に産卵する習性があるためテリトリーを守ってパトロール行動する。これも川の水位が普段より高めだったせいで、長雨がもたらした夏の置き土産である。

### 「秋の七草」

スギ林の付近はヤブになっていたが、一つ一つをながめると、そこはもう秋の草花でいっぱい。秋の七草とい

えば、万葉の時代に山上憶良が詠んだものが有名で、萩、尾花、葛、撫子、女郎花、藤袴、朝顔の七種が知られている。ただし、朝顔は古くからあった桔梗という説と昼顔という説とがある。尾花はススキのことで穂をケモノの尾にみたてたのが名前の由来である。

野生種ということ、萩、尾花、葛は日本中よく見られるのだが、女郎花や藤袴のようにほとんど自生していない植物は近縁種を指す場合もある。境内周辺に見られるのはどれだろう。

### 葛（クズ）

クズは広い葉をつけて10m以上になる蔓を伸ばすマメ科植物である。夏の終わりには山林の周辺をおおい尽くすほどの勢いがあり、若い植林地では、やっかいな植物のようだ。里山や人里離れた高原にもクズは普通に見られる。

赤紫色で長さ10cm以上の上向きの花をつけ、なかなか美しい。花をたくさん集めて酢を少々入れた湯で煮るとアズキ色になる。軽く砂糖で甘味をつければ、ほんのり花香りが漂うアズキ湯の感じになる。この時期の観察会でよく用いる得意なメニューである。

また、クズは地下の根に良質のデンプンがあり、これを取り出して古くから葛湯にしたようだ。葛餅、葛あんなどもこのデンプンを加工したものである。

以前、鳥取の大学の先生が全国に呼びかけタネを集めていた。それは砂漠化の広がる中国へ送ろうという運動だ



った。クズのようなマメ科植物には、根に根粒菌が共生するため養分が乏しい不毛の地であつても乾燥さえ乗り切ればよく育つので緑の復元が可能である。クズを上手に使えば、まだまだ役立つ植物である。

葛の蔓ひたすら垂れて地を探す

沢木欣一

### 男郎花（オトコエシ）

オトコエシは花が白く、オミナエシは黄色であるが、植物分類上でもオミナエシ科・オミナエシ属で両者はきわめて近い関係にある。俗にオミナエシに対しては女郎花、オトコエシには男郎花の文字があてられている。オトコエシの方は花が大きく茎も太いから男に見立てている。花は、粟粒状淡黄色で、よくオミナエシと誤認されたり代用されたりする。日当たりのよい山野に自生し、境内奥にもひっそりと咲いている。女郎花は今や消えつつある植物で残念である。

小笹吹く風のほとりや男郎花

北原白秋

### 藤袴（フジバカマ）

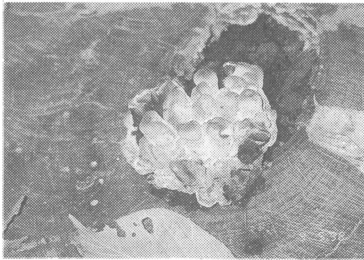
藤袴は奈良時代に日本に帰化したように関東以西に分布する。花がフジのように赤紫色で一つ一つの筒状の花を袴に見立てたのが名前の由来のようだ。しかし、藤袴は生育地の河川敷が開発され、希少植物として「レッドデータブック」に載せられてしまひ女郎花よりも深刻だ。

これとよく似た花をもつヒヨドリ

バナが誤認、

または代用されている。ヒヨドリが秋に

里にきて鳴き出す頃に花が咲くことからこの名がつけられた。生育地によつてヨ



ツバヒヨドリやサワヒヨドリなどの仲間があり、群生する。

### 「ナンヤモンジャキノコ」

山門前の松の切株上に、キノコの大きな塊が生えていた。長雨のせいか、今秋のキノコ時期は早い。初対面のキノコで、まだカサの開きが小さく判定に頭をかかえているとき出てきた言葉が「これはナンジャモンジャヤ?」。断つておくが、こういう名前のコケ類が実在する。表面はやや褐色がかつた黄色で、多数束になつた特徴から「オワライタケ」と判定した。

凶鑑には毒とあるが、死にはいたらない。多く食べた人によると、周囲の状況がゆらゆらゆれて幻覚が生じ頭がくらくなるもの、大笑いすることはないとのこと。このキノコにはLSDと同じ成分が含まれているためらしい。サイケデリックな世界になるそうだが、このキノコを味わおうという勇氣ある人はいるだろうか。

「臨時得意・年中行事」(三)



〔年中行事〕

正月のつづき

○十四日 昼、越前の法事の方より案内に来る。回向相済み膳出る。

夜に入り説法。諷誦多し。

(朱書入レ)

「十五、六日五ヶへ参り候節、煎餅五ツばかり用意持参のこと。

檀中、普請の義ならびに祝儀致し候家へ遣す物也」

○十五、六兩日 昼説法、四ツ時(午後十時)頃より、本家において執行。其後法事方へ参候也。滞留中本家に止宿。十九、廿日頃帰る。

二月

初中後、説法。初後之内月次御講。

中日……法事讃鉢、其後説法。

(朱書入レ)「五日前のうちに出雲崎へ

岩屋七面宮のお礼納むべき事」

○十五日 御涅槃会、涅槃像、前日より懸け置く事。

法事讃鉢、其後説法。多分此日、月次御講ある也。

三月

○三日 説法、菱餅多く来る。

廿日より大会用意。気づいたことから作り置くこと。

この日、大会の夜具借用の相談いたし廿七日参詣の節、持参するよう頼むこと。

○十三日 月次御講、御経説法

御供膳、割前より供る。

○廿六日 佛前荘嚴、諸式(いろいろな品物)買物、夜具等借用のこと。

(朱書入レ)「十五日割前番神宮祭礼法樂二所化壺人、本家まで遣すべきこと。

○廿七日 昼説法、夜法事讃鉢説法。

○廿八日 法事同前、説法

宝印開帳。今朝五ヶ浜より宝印御入りの節、堂門御拝口まで御迎えに出るべきこと、また宵と朝と御膳供する時御経あり。

四月

○八日 灌佛会、前日より花御堂用意、甘茶三十匁ばかり調い置くこと。

昼法事讃鉢説法、多分此日月次御講

五月

○五日 説法、中旬頃、麦奉賀に出すべきこと。

○十二日 御難会、御経説法、この日月次御講。

(朱書入レ)「十八日東汰上内藤氏へ観音祭祀につき毎年失念なく使僧遣すこと」と

六月 月次御講、土用中醬油仕込む。麦、大豆各五斗ずつ。

七月 ○一日 施餓鬼、法事讃鉢、説法五色の紙旗、兼てより用意。

この日村方檀中女衆、塩米持参お参りに来る。この時酒出すこと。

○十五日 月次御講、御経説法、この日岩屋に踊あり。(盆踊りと思われる)(朱書入レ)「施餓鬼棚、正面に直し参詣揃い候て御経一席」

○十九日 七面宮祭礼、御経説法、御供に赤飯、割前本家施主。

八月 彼岸会如春。中下旬見合せ大豆奉賀に

出す。

九月 ○十二日夜 御難会、御経説法、参詣少き時は祖書素読時宜。

○十三日 月次御講、御経説法。

十月 ○七日、八日 御盛物の餅搗き、米二斗五升、赤青白の三通り。但し、棒餅はクジラ三寸、菱、三角餅はクジラ二寸。粟一斗程、上旬より用意。

○九日、十日 佛前莊嚴

○十一日夜 法事讃鉢、説法

○十二日朝 御膳供える時、讃鉢法事昼説法、夕御膳御経、夜法事讃鉢説法(朱書入レ)「勤経の節、祖堂祖像開帳、直に閉帳、十三日同断」

○十三日 朝御膳、御経。昼法事讃鉢説法、餅搗の翌日頃、諸買物に遣す時酒一年調いおく。十一日夜より時々心得候て、講中世話人等へ振舞い候こと。

ならびに堂内諸式相頼むにつき、村内働きの男女へ酒出す。よくよく加減しないと一斗にては不足候也。もつとも

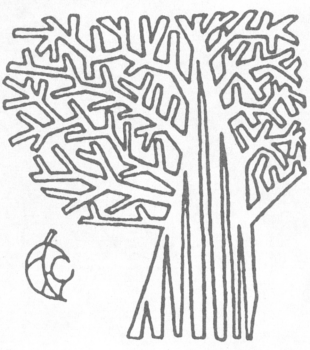
檀那より四、五斗到来もこれ有候。

(朱書入レ)「十三日参詣の割前の老女二、三人に、十四日膳碗のあとかたづけに頼置くこと」

○十四日 酒一斗準備。この夕、村役人ならびに面立てる檀中、都合九、十人、相招き振舞い之有り。若し法用に差支えある場合は、一両日おくれてもよい。献立は時宜たるべし。

(九日から十四日まで御会式前後の留意事項が記されている)

(石田誠太郎)



# フェスティバル報告



フェスティバル安穩が八月二十二・三日、今年も天候に恵まれて開かれまして。早いもので九回目になります。当日参加二百人、懇親パーティーまでと宿泊付の両方で七十人、スタッフも加えると三百人を越す過去最高の人数です。

講演の柳田邦男さんの人気も大きかったのでしょうか、本堂一杯。それが柳田さんの目前まで膝ずめになって聞いているのですから、話す方も聞く側も熱を帯びてきます。講演時間は伸び、亡くされた息子さんのお話では涙も浮かべておられました。ことに「息子の自殺から五年になり、悲しみも薄らい



だかのように人に言われますが、私の心の中は逆です。あの子の存在が益々大きくなり、それが今私の生きる支えでもあります。それを魂と言うのでしょうか」の言葉が印象的でした。「ノンフィクション作家だけど、今日はお寺さんだから「魂」のことを語り

たいんです」と控室で話され、柳田さんのお話を聞く場としても良かったとスタッフの反省にもありました。

講演の後「お話はもちろん、お願もお召し物もとってもよくて」との高齢の女性の言葉に会場がドツと沸くなど、質問の時間はとても和やかなものに。また予定では質問の時間終了後、すぐお帰りになる柳田さんでしたが「とても雰囲気がいいので法要の最後まで参加したい」とおっしゃって、それでまた会場が盛り上がりました。新幹線を二時間遅らせ、切符やタクシーの変更に走るスタッフも嬉しい悲鳴でした。

法要は昨年好評だった南米ベルーの民俗音楽を再度お願いし、哀調をおびた音色が夕焼けの山に響きました。ことに今年は、日蓮宗布教研修所で研修中の青年僧侶八人が研修のために参加、総勢十七人の僧侶による読経となりとても荘厳でした。

日本第一号地ビール“エチゴビール”

のバブ貸切の懇親パーティーは、定員オーバーの百十人で踊りの輪もできるなど賑やかに。宿でも二次会で語り合いました。初めて参加した檀家のご夫婦は「こんなに楽しいならもつと早くから参加すればよかった」と。二日目は公的介護保険と、遺言等で公証人役場の利用について情報交換しました。

数分ですがこの模様が九月にフジテレビ系列の「ニュースジャパン」で全国放送されました。

来年第十回になります。記念する集まりにしたいので一月早々に企画会議を開いて準備にかかります。八月二十八・九日を考えていますので予定に入れておいてください。

今年も新聞、テレビで多数紹介されたこともあり申し込みが続きました。三基目も七十七件となり、最後の四基目も先の話ではなくなりそうです。基金運用は“寺の動き”ページでご報告しています。

刻んだ文字が色あせして、見えにく



い墓碑が多くなりました。全ての墓碑で前の塗料を落とし、落ちにくい塗料に塗り変えました。

## 国際交流

安穩基金（安穩廟の収益による基金）の一部で国際交流をして、より広い視野で仏教を考えることを当初の計画にうたっていました。その実現としてチベット人仏教僧の韓国留学に、年五十万円の奨学金を継続して出し、三國間の仏教交流をはかる。これを三月の妙光寺役員会で承認し、ソウル大学の協力が得られることになっていました。その留学僧が決まったので面接に来るようにとの連絡で、十一月に住職と大滝檀家総代、石田安穩事務局長が訪韓しました。

午前十時、ソウル大学で直接担当くださる仏教哲学の沈教授を訪問し、留学僧のトゥッテンさんを紹介されました。インドの北、ラダック生まれの三

十才。十才のときこの地の寺で出家の後十年間修業して以来、各地で修業した経験を持つています。ラ

ダック語、チベット

語、ヒンズー語、英語、日本語ができますが、ソウル大学でこれから韓国語を勉強し、春から沈先生のもとで仏教哲学を三〜四年勉強することになります。

ソウル大学の正式な受け入れ窓口となる、国際交流センターで所長に挨拶。ソウル大学の国際交流は遅れていて、海外からの奨学金は初めてのケースと聞き驚きました。妙光寺からのお金は一旦ここで基金として預かってから、本人に渡すということです。

学内の来賓用レストランで昼食をとり、お世話くださる人類学の李教授に広大なキャンパスを案内していただきました。三時から住職の人類学科大学院院での特別講義。学内新聞でも広報され、二十人ほどの大学院生と先生方

が集まり、主任教授の挨拶から始まりました。通訳は東京大学に留学していたという大学院生。二時間余りの講義と質問にも答え、また主任教授の挨拶と記念のプレートをいただいでどうにか終了。

日本語が堪能で夕食を一緒にした李先生と一団話はずみ、来夏には妙光寺に、となりました。





## 福引で特賞



ヒマラヤの高地で見る青空は、空気が薄いためにとても深く、神秘的な青い色をしているのだそうです。だからチベットの修業僧は高原の丘に座って、青空を見つめる訓練をして、しみ込んで来る青空の中から、宇宙的な力の流れの实在を見いだすのだそうです。

自分の心の中に染み入るような体験は毎日の生活の中ではそうたびたびあるわけではありませんが、ここぞ…という時にタイミングよく何かが起こることはありますよね。それは自分の努力でも、がんばりでもない。ふつてわいたような幸運。仏さまからいただいたごほうびのようなもの。

「もうこんなに苦しいのだからどう

にかなってしまいかも知れない」と、ぎりぎりのところであきらめようとする。すると弱くなった心を救ってくれかのようにポロリンと少し良いことが起きたりして、「まんざら捨てたもんじゃないかも」気をとりなおして頑張ってしまう。

私はこんな事を感じることがよくあるので、この自分はいったい誰に生かされているのだろうと思うことがあります。

娘達には、「自分の人生は自分で決めるのだよ。」と言っているくせに。

不景気で世の中に夢や活気が無くなり、暗くどんよりとした感じのこのごろ。

「なんでだろ。何にも悪いこととして

ないのに」

良いことも悪いことも全部自分の力ではどうにもならないことなのかも知れません。

チベットの僧侶がヒマラヤの空で感じる宇宙的な力と、俗世間で実感として学ぶ「なんでだろ」は似ているように思いませんか？

実は、数日前にお寺のギンナン拾いがようやく終わって、ギンナンを洗う川の水の冷たさが骨身にしみて、「あーあ、もういやだ！」と思いがながら、スパーに買い物に行きました。お参りの方のお団子を買ったら、福引きの券を一枚だけもらったのです。団子屋の方が「今、すぐひいていきなさいよ」と何度もいうので、欲もなくなつた一回のくじをひいたらなんと特賞でした。

疲れて、ぼーっとした頭に盛大な鐘が鳴り響き、名前を張り出されたのでした。

小川なぎさ

# 行事案内

## お札配り

十二月に入り来年の「お札」を持って、暮れのお経に各家に伺っています。住職と鎌田が手分けして回りますので、どちらかが伺います。

## 大晦日 除夜の鐘

大晦日夜十時半から本堂で除夜法要。引き続き十一時四十分ころから除夜の鐘を撞きます。どなたでも先着順に一回づつ撞いてもらいます。撞いた方には番号の書いた記念品（鐘樓堂隣の大イチョウになったギンナン）と、楽しい縁起物が当たる抽選があります。温かいコンニャクも出ます。

同時に本堂前でお焚き上げをしますので、古いお札、しめなわ等お持ちください。尚スルメの用意はありません

ので念のため。

毎年この時間帯に車が集中して出入り口付近で混雑します。十分ご注意ください。

## 元旦 年始参り

元旦の朝九時から午後四時ころまで、年始参りの受付しています。一年の始まりは妙光寺本堂の仏様参りから始めましょう。お出かけください。

平成十一年に法事のあるお宅は、祖師堂に貼り出しております。確認のうえ、日取りは早めにご相談ください。一年の家内安全、健康、幸運を祈願する「星祭り」は一件二千円です。新規の方は、家族全員の名前と生年を書いて年内にお申し込みください。家族ごとにお札をお渡しします。

## 団体参拝旅行の計画

平成十一年は十月に身延山・七面山の予定です。

あ・と・き  
あ・が・き



春と秋の号を休んでしまい、今年のは二回の発行でした。お詫び申し上げます。一回出すのに一週間余り集中する時間が要りますが、それがなかなかできなくて…。来年はきちんと四回出したいと思っています。

これが届くと必ずお便りをくださる方が何人かおられます。いつも嬉しく拝見しています。どうぞ遠方の方近況をお知らせください。

お陰さまで住職一家は皆元気で。個々に年賀状を差し上げられます。来る年が皆さんにとってよい一年となりますこと、お祈りいたします。

(小川)